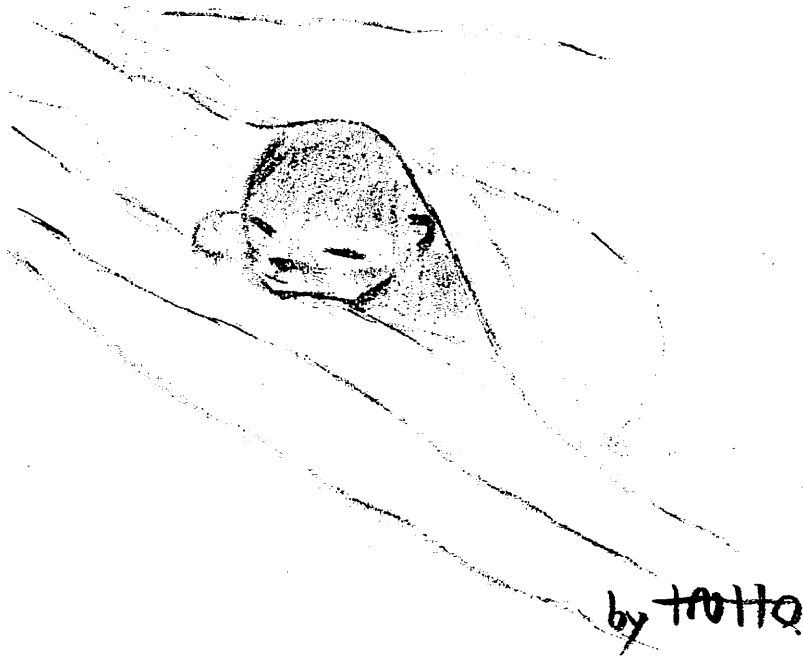


2003

無雪期山行
報告書



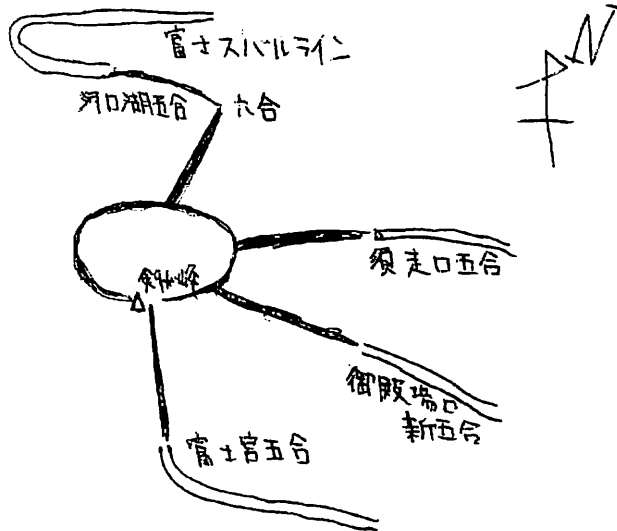
by totto

S A C

信州大学山岳会

富士山 5/10 ~ 5/11

高谷 英太郎(2) 片寄 哲生(3) 佐藤 祐樹(4) 三森 武志(2)
駒井 浩, 池内 寛幸, 花谷 泰広 (富士山岳会)



5/10 河口湖五合 ~ 六合目TS

現役衆は、松本から車で五合目へ。五合目で駒井さんと合流して今日のテニ場である六合目に向かった。六合目には、1時間弱について、小屋のかけこみテントを設営した。この日は夕食としてカレーを作った。作っている最中に、富士宮口から頂上経由で池内さん、花谷さんが合流した。この日のカレーは、合宿でのカレー風味ポトフではなく、しっかりとしたカレーで、お味噌、9丁7食べた。ギョウギョウマのテントで就寝。

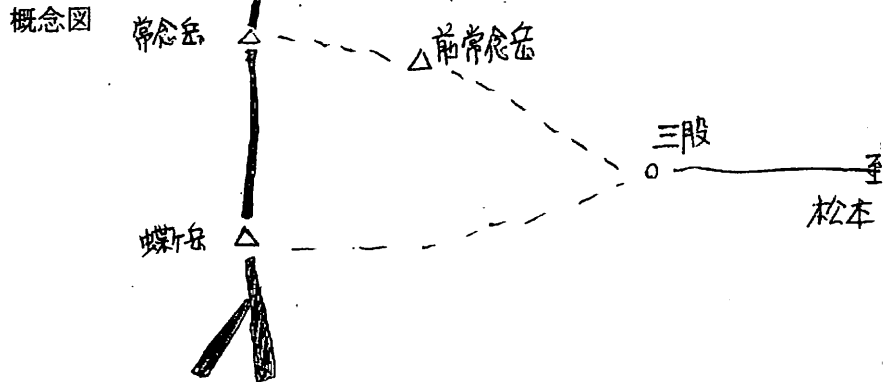
5/11 TS ~ 久須志神社 ~ 測候所 ~ 吉田大沢 ~ 下合TS ~ 五合

この日は、天気が崩れるということだったので早立ちをして山頂に向かった。登山道に雪はなく快調にとけす。3時間強で神社に到着。お鉢めぐりにむかう。途中測候所の中に強力をしている花谷さんのおかげでいれてもらうことができた。コックの人と1時間程楽しく話した。剣ヶ峰山頂で、駒井さんの還暦祝いのムンパンをあげ登頂を祝す。下りは吉田大沢をツリセド、ワリセド、立ちセドで下る。TSを徹収し五合へ。

今回の山行は、僕と駒井さんのOB会の中の会話の中で決まりました。今回のようなOBと現役の山行は大変有意義なものと思う。40歳の年の差をこえて山下は同様のパートナーとして同じ感動を味わうことができました。また、かっましよう!!

常念岳～蝶ヶ岳日帰り縦走登山 6月8日

メンバー 片寄哲生 高谷英太郎 小尾智明 高橋昭彦 加藤なゆ樹



コースタイム

6/8 BOX 集合(2:00)～三股(5:00)～常念(9:30)～蝶ヶ岳(13:05)～三股(16:15)

ボックス集合後すぐに出発。

三股への上りの林道になると、誰もが貧乏チャリに乗っているものだからギシギシときしむ音やら、チェーンがガキガキいう音やらが木霊し始めておかしかった。相変わらず三股の駐車場はあっけなく現れるから物足りない。

すぐ出発。登山道が始まった矢先の沢で水を汲んで、ひたすら登る。常念山頂までこの道に雪はない。森林限界を超えた辺りで加藤がバテ始めた。やはり前夜あまり寝ていないらしい。

鮎をあげて勵ましつつ山頂を目指して9:30到着。10:00まで昼寝も兼ねてゆっくり一本にする。寝た……。

出発して常念の下り。ガスっている中からいくつかのパーティーが現れてはすれ違うのを繰り返している内に、池(名前を忘れた)の辺りから残雪が現れはじめた。登山靴に履き替えて、ピッケルも着け、再発進。まったく問題はない。強いてあげるとすれば、スパッツがないために雪が靴の中に入ってくること位か。

横尾からの登山道との合流点まで来ると、しぜんと新人合宿に来た時の記憶と比較しはじめているから不思議だ。濁沢は見えていたかどうか覚えていないが、いずれにしる馴染みの風景のある場所だと思った。

小屋で一服。風が冷たい。医学部山岳部の知り合いと会ったので話をしてから、先に下山を始めた。すぐ雪のドリ道になっており、念のため一年生の下につきながら下った。雪は量は多いとは言えないが、登山道上に確実に残っているため、それ用の装備でなくては

歩くのが怖い。

まめうち平と言ったか、その辺りまで来るともはや残雪は全くない。しかし、雪解けでぬかるんだ場所が多いため登山靴はまだ脱がない。最終的に力水のところでジョグシューに履き替えて、その後の軽い山道を軽快に下って三股到着。最後の砂利道を走って下って駐車場に着いた。

自転車は下りの方が危険だ。よく言い聞かせて下り始める。気持ちよい下り道が終わった辺りから進路はバイキングレストランへと定められた。猛スピードで探し当て 5 匹の餓鬼よろしく食いつくした。

バイキングが終わってみれば、食いすぎで自転車に乗れないとぬかす 1 年が出る始末。食欲があるのはいいことだが……。松本トンネル前からの峠道を越えて松本に抜けようと、坂を登り始めた頃にはすでに辺りは真っ暗。殿を務めて自転車を走らせていると、坂を下りてくる車のおじちゃんから『がんばれ!』の声援が。酒沢走りを見て感動していたおじさんがいたそうだが、中年層にはこうした光景がなにか感動的に見えるものらしい。

真っ暗になった松本、明かりのついたボックス。何人かの上級生がくつろいでいるボックスにやっと到着して、第一回自転車山行が終わった。

【反省】

- ・ 寝不足だったこと。
- ・ 自転車の調子の良し悪しに個人差があり、ペースにわずかながらの差がでたこと。

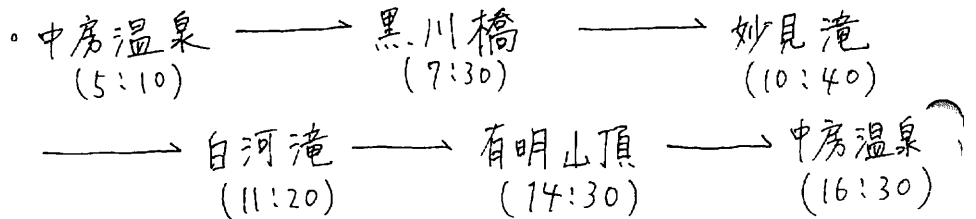
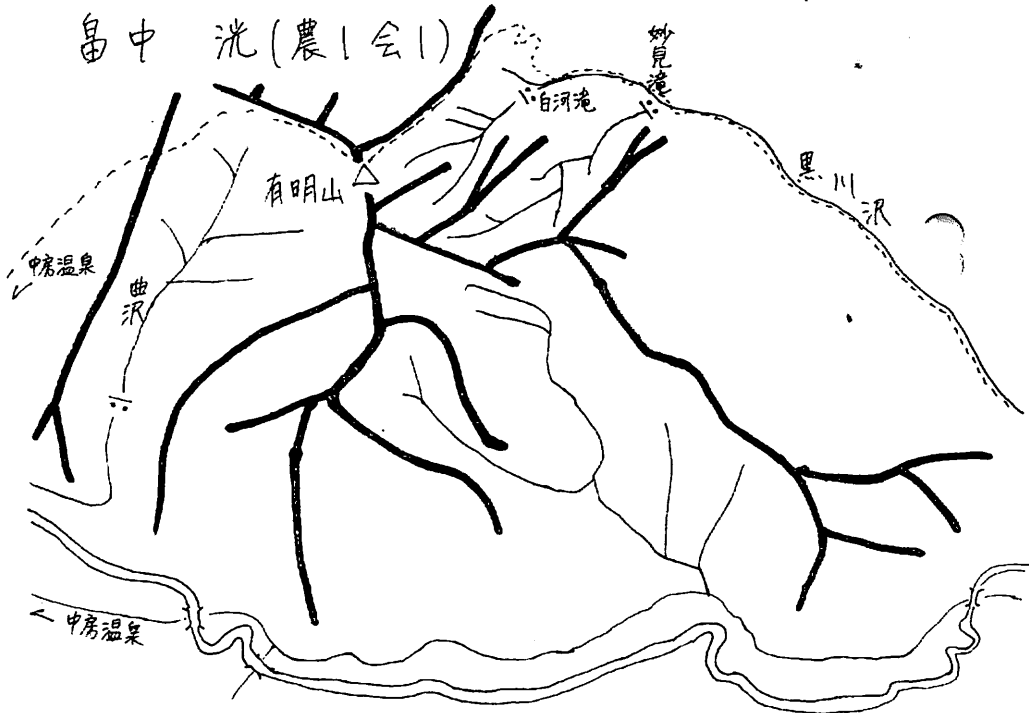
【感想】

- ・ 新人合宿後の初山行が自転車ということで 1 年生がどう感じたものやら! 今この報告を書いている時点では、1 年自らすでに自転車山行を実行している位だから気に入ってもらえたのではないかと自己満足中。

有明山、黒川沢

・横山 輝生(織4会6), 佐藤 祐樹(理3会4)

畠中 洸(農1会1)

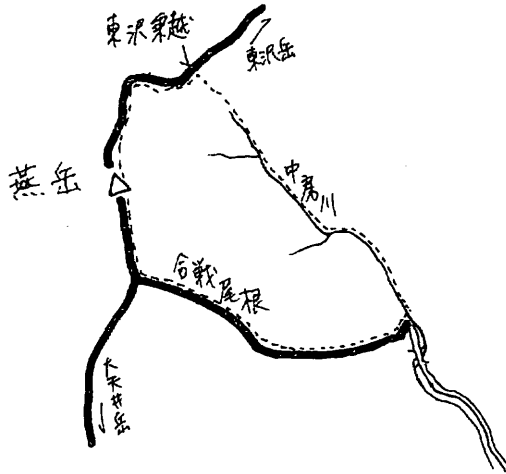


妙見滝と白河滝は冬はアイスクライミングにもってこいという感じの滝だった。白河滝の方は崩壊が激しかった。白河滝から上は流水はかなり細くササヤブが続くとこ3かあり、疲れた。尾根に出ても山頂まで付け、こうまっかた。有明山頂付近は神秘的な雰囲気かしてなかなかいいと思った。中房温泉までの下りは木の根がほり出して、ぬかている時は滑りやすい。僕は実際に10回ぐらいいは滑ってこけたと思う。

燕岳

・佐藤 柘樹(理3会4) 小尾 智明(工1会1)

加藤 なゆ樹(理1会1) 島中 光(農1会1)



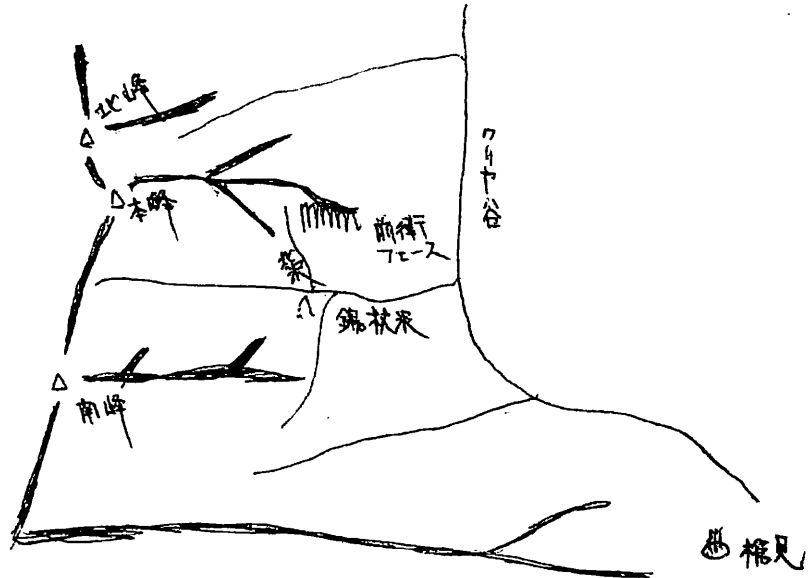
中房温泉 → 合戦小屋 → 燕岳 →
(5:00) (8:00) (11:00)

東沢乗越 → 中房温泉
(13:00) (16:00)

こまくさか咲き乱れていてきれいだった。こまくさを生で見るのは初めてだったので感動だった。がスのせいで展望はきかなかたが、降水確率が50%以上だったにもかかわらず降られたのはしほっち目たワテラッキーだった。東沢乗越からの下りはあまりいい道ではなかったが晴れ間もあって順調に下山できた。中房温泉の車に着いたところで雨が降りだして本当にフイってたなあと思った。

錦杖岳(左カニテ) 日帰り

山 佐藤 祐樹 (4) 高谷 英太郎 (2)



権見温泉 6:00 ~ 左カニテ取付 9:00 ~ 終了点 12:20 ~ 取付 13:20 ~ 温泉 15:00
夏合宿前に本カニテ経験をためるために、佐藤さんと錦杖へ。取付までには
ゲテューで快適にとぼす。取付からは10-12度で少し登りスタート。高谷リードで
トハニ開始。つるつるで順調にロープを伸ばす。44m-は思いきりぬえ7117
ひしひしとになりながら登る。A1ピッチをフリーでこなせたと喜び。V字の
心は佐藤さんリード。ちかちか怖かたけとフリーでこなす。最終ピッチはビビ
で、フレックをホールドに慎重にのぼり終了点へ。往路をリンスイし取付へ。権見温
泉へ車から下り。湯にま.たりとつかり帰路へ。

今回の山行は、自分の本カニテのリードの経験を上げてみることができ、沐からの
山行の幅を広げる上でも、とても有意義な山行であった。それにして毎日帰り
錦杖に行けるのだから、信太にきてや.はり良かった。

リザリ通れる程の林道が通っている。堰堤は道がかり、堰堤を
過ぎればあとは沢登りが始まる。

コースタイム

信大BOX出発 4:20 → 新原林道 車下地点 4:40
→ 堰堤口 5:00 準備後 ミズ(餌)採レ。
出発 5:20 → 二股 6:50 → 釣り開始
出発 → 大滝 10:30 登攀 → 車下地点
到着 12:00 → BOX 12:30

地獄谷大滝までは普通の沢登りが続く。二股を過ぎたあたりで佐藤くん、
加藤兩名が釣りにのぞく。佐藤くんは数尾釣り上げるが、加藤 null。加藤、
初心者ぶらぶら出で、糸を枝にひっかけ。

大滝にすしかかり、登攀準備をする。ザイル 7mm 25m, リード三森さん。全面
濡れているので滑るかに注意すること以外特に問題なし。さうに先は沢が続く。
顕著な二股を右へ入り、ようやく源流らしく川状になる。その辺りから尾根にと
りつく。ヤブ漕ぎ後、途中で林業用の道に合流。ヤブ漕ぎの際中に、加藤、
外がけして、た釣り竿をなくす。

反省・感想

女鳥羽川上流といえば、我が信大岳会の最近の沢登りホムウランドであった。
しかし、お水までは話によると大滝からは巻くよ、尾根へからせていたようだ。
お水が今回の山行で「大滝の登攀」が成功し、一応は地獄谷の制覇を果た
し、更なる前進を図ることになった。しかし残念なことに、最初の堰堤を越えた所
にいくつかの「入山禁止」の貼り紙があった。言的分としては「まに」にまつる事がか
かげらぬいたが、今回は強行突破したが、今後管理体制等がどうなることや
ら一同心配である次第だ。

また、この日は水曜ということあり、昼には部会が控えていた。従って何れも
正午には学校のBOXに戻る必要があった。が、結果的に30分ほどお水、我ら3
人不在のまま部会は中途半端に終了。以後、こらた事は計画段階でどう
少く対策をたてた方がお水とうであると思う。

最後に個人的な事ではあるが、「外付けは作るだけしないに越した事は
ない。する方は必ず「バウアンプ」をくれ！」というのが教訓である。

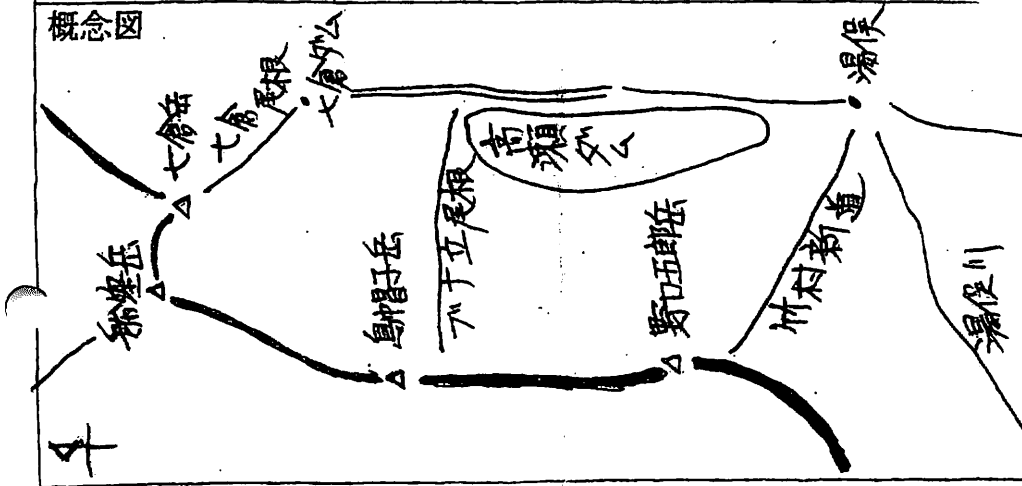
文責 加藤 中樹

船窪岳～野口五郎岳縦走 ～自転車山行 PART II～ 7月12～13日

文責 片寄

メンバー 片寄哲生(会3、織3) 高橋昭彦(会1、農1) 加藤なゆ樹(会1、理1)

概念図



コースタイム

7/12 BOX(2:45)～七倉山荘(7:30)～船窪小屋(12:00)～船窪岳(13:25)～
2459ピーク(14:50)～南沢乗越手前コル(17:50)

午前2時ボックス集合。簡単な支度を整えて、まだ暗い中を自転車3台で出発したのが2時45分。一年二人は程々に睡眠時間を確保したようだが、上級生たる片寄はたった1時間しか寝ていなかったため、大町に至るまで頭が朦朧としており一向にスピードが上がらなかった。自転車こぎながら何度寝そうになったことか。約1時間ごとにコンビニに寄って休憩(朝寝もしくは仮眠?)を取り、何とか七倉山荘にたどり着いた。

山荘前の駐車場に自転車を置かせてもらってすぐさま出発。

船窪小屋まではなんてことはない登山道をひたすら歩く。若干急登といった感じだが、着々と高度を稼いでいっただけだ。心配された雨も降って来ず、薄曇りのために休憩後に背負うザックの冷たさを背中に感じる程度。森林限界を越えたところで一本にするが展望はまったくない。それでも船窪小屋に着いた頃から雲が裂けはじめて、これから歩くであろう稜線が切れ切れに見えてきた。船窪小屋キャンプ場下部の水場で予備のペットボトルにも満タンに水を補給して先を急ぐ。ここから先は不動沢側の崩壊が激しく(1年前の夏の縦走時よりもさらに崩壊していた)、登山道を歩くのにもどことなく不安が漂っている。

船窪乗越から先、2459ピークまでのアップダウンのエグさは去年の縦走で経験済みだったので覚悟してはいたものの、今回の軽量の荷物でもやっぱりエグかった。2459ピークに着いた頃の天気は晴れといった感じでまだ当分もちそうだった。しかしこの時点で一年加藤に疲れが見え始めてきた。すでに12時間行動しているから無理もない。先を急ぐ必要があったので加藤の団装をバラした。

ひたすら足を前に出していくだけの運動が延々と続く。まだ尚天気は持ちそうだった。これなら暗くなるギリギリまで歩けるはずだった。

不動岳手前辺りから今夜のビバークポイントを探し始めた。雨が予想されたため都合のいい岩小屋風の場所がないものかと期待したが、結局そんな場所があるはずもなく、登山道のど真ん中にツェルトを張ることにした。

すぐさまエッセンを開始するが、疲労の限界を超えたのか加藤はそのまま寝込んでしまったので、高橋と二人でキムチうどん作りに勤しんだ。出来上がって食べる頃には、悪くなると思っていた天気も谷間に雲が漂っているのが見えるだけで、視線の彼方にある山々がはっきりと見てとれた。

薄暗くなっていく山の景色を眺めつつうどんを食べ終えて、後は三人肩を寄せ合って夜を迎えた。

7/13 起床(2:30)―出発(3:40)～烏帽子岳分岐点(5:20)～烏帽子岳(6:00)～烏帽子小屋(6:30)～野口五郎岳(9:00)～南真砂岳(10:30)～湯俣(13:00)～七倉山荘(16:10)

今日も長時間行動になる。というわけで早起き。

始めの約1P分をヘッドラ行動にして距離を稼ぐ。日の出とともに唐沢岳の山塊が見え出した。幕岩も見えるかと思いきや雲海が取れないために結局見えず仕舞い。

烏帽子岳分岐点までとところどころ雪田をはさみながら軽快に足を進める。

烏帽子山頂にて少々のおんびり。

烏帽子小屋に着いてみると天気が崩れるような雰囲気もなかったので、ここまで来たら行くっきゃない!と、野口五郎を目指すことに決定する。

これまでもいくつかのお花畑を目にしてきたが、烏帽子小屋付近は特にコマクサが多い。晴れ渡り始めた空の下の稜線歩きが気持ちいい。途中2792ピーク付近で一本取っただけで野口五郎岳に到着した。

天候はまだ悪化していないものの、湿っぽい風と薄黒い雲が目につき始めてきた。帰り道の自転車が心配なので早々に下山を始めた。水晶小屋への道から湯俣への下山路に移ると、始めの数分は全く普通の道だったのに、残雪、さらには崩壊しまくっている場所が現れて、思いがけない所で慎重さを要求された。ここで神経を要したため、南真砂岳で一本。

後はひたすらの下りがあるだけ。この道の下りは急降下には違いないが、急降下の割には道沿いの木々が手の置き所となるため、大胆に下ってもいつでも制動がかけられる作りになっているから、楽しみながら下山できる。かと言って、標高差はかなりのものだ。さすがに一気に下山するのはやめて、一息ついた。

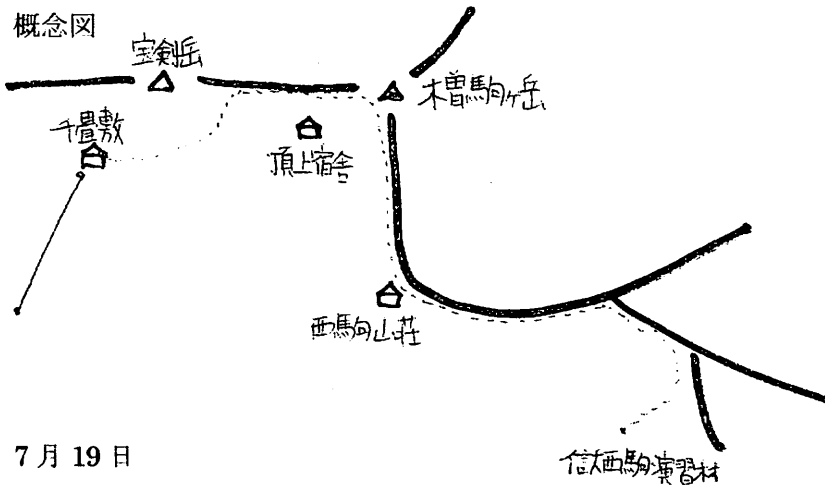
最後の数百mを一気に下りて湯俣に到着。13:00。水場で顔を洗わせてもらってすっきりしてから再出発。まだ長い林道が残っている。ジョグシューだから恐くもないが、重登山靴で10km以上の林道歩きなんて言ったら絶対お断りしているところだ。

ほとんどノンストップで高瀬ダムまで歩いた。高瀬ダム直前のトンネルに至る大分前か

木曾駒ヶ岳

L 三森武志(会 2) 小尾智明(会 1) 畠中洸(会 1)

概念図

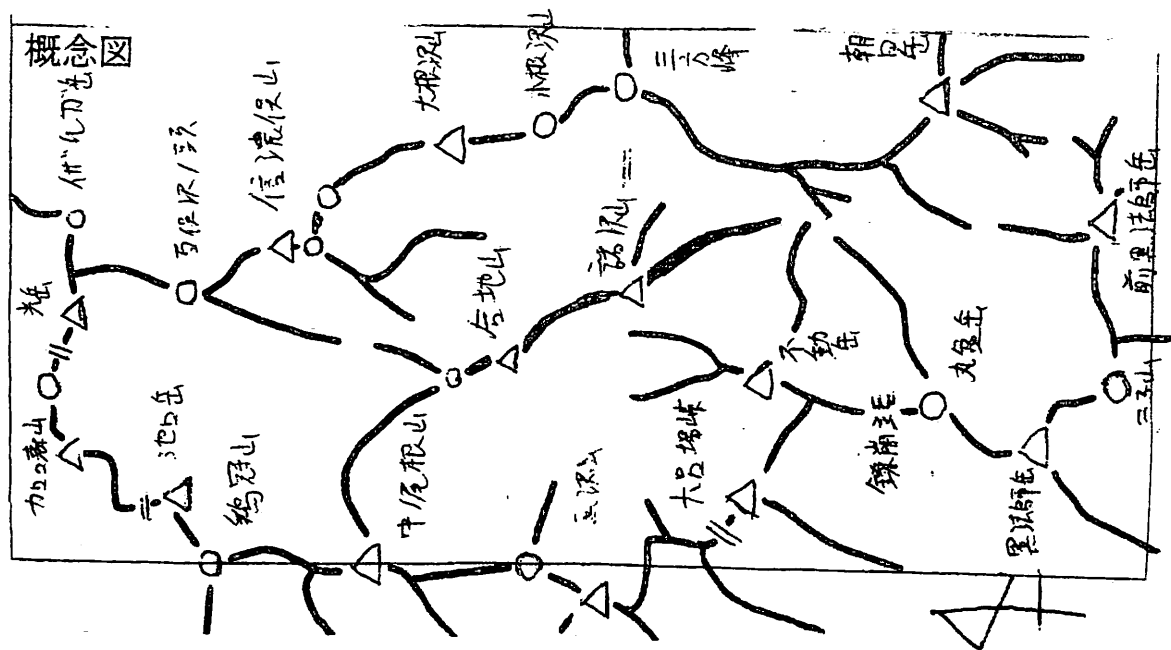


7月19日

西駒演習林 5:10～西駒山荘 9:10～木曾駒ヶ岳 11:10～頂上山荘 11:30～千畳敷 13:30

朝、上空は曇っていたが、登れば晴れるなどとお気楽なことを言いながら出発。天気の関係ない林の中の登山道をのんびりと歩く。稜線に出る少し前くらいから雨が降り始めてきたので雨具を着る。西駒山荘に着いたころには風も出始め、雨もますます強くなって来るようだった。そこから10分ほど行ったところでハタケがめがねを落としたことに気づき、探しに引き返す。幸いすぐに見つかるがそのころには風雨はもう十分に強くなっていた。それでも何とか木曾駒までたどり着くも、雨は顔に打ちつけるし風は荒れ狂うしで寒い寒いと言いながら数分と経たずに山頂を後にした。とりあえず頂上山荘に着き、この先どうしようかと考える。この雨風で鎖場はちょっと怖かったので千畳敷に向かい、行けそうだったら極楽平からさらに南下しようということにした。あきらめ7割、期待3割で歩いていた千畳敷への下りでいきなり小尾が足をつってしまう。ダメだこりゃと思ってそのまま千畳敷から下山。

ああ、なんて情けない。自分が風雨にこんなにもろいとは思わなかった。夏にこれほどの悪天にあったことはなく、今回が初めてだった。また自分の考えも、悪天であっても大したことはないだろうという甘いものだった。この点を反省して次に望もうと思う。



2/4 松本=叔峽温泉~朝日岳登山口~朝日岳T.S

登山口で水を20L飲み登りたす山頂まではいかりとした登山道で問題なし。この日は山頂をテニ場とする。

2/5 T.S~大無間山回畔~アザミ沢のCOLT.S

テニ場から朝日岳を下る。今日から登山道はなくコンパスが必須である。ケモ1道のようなものとコンパスをたよりに三方嶺へ。三方嶺から崩壊地を11に北上し小根沢山をこえ、アザミ沢のCOLT.S。アザミ沢のCOLT.Sでは水が得られる。おびのけの斜地にテントをける。

2/6 T.S~大根沢山~樽沢の頭~樽沢山~信濃俣T.S

この日もケモ1道とコンパスをたよりに歩を進める。大根沢山頂からの下りはコンパスでいかりとかく認して下る。そこから樹林の中をコンパスとケモ1道をたよりに進み、信濃俣へ。ここまで木場はない。山頂にテントをける。

2/7 T.S~信濃俣の頭~光岳~加加森山~池口岳~~池口岳~~池口岳手前のCOLT.S

この日は去年敗退した所だが、たのて配たが、今年は何の問題もなく光岳へ。ここで小屋の主人にここから先についての情報を聞く。この御主人は、深南部に精通しており、木場の位置からルート状況までとてもためになた。池口岳手前のCOLT.Sをテニ場とした。ここは単沢への下降点で木場の標識がある。

8/8 8/9 台風のため沈黙

ツェルトで台風を耐えた高橋君お疲れ様です。

8/10 T.S ~ 池口岳 ~ 鶏冠山 ~ 中尾根山 ~ 黒山付近T.S

この日は2日の沈黙あけとあって快調にはせず、中尾根山を下ってからけササバとなり黒山の登りからは2m程のモ-シツなヤアとなる。この途中で小尾選手が足をつってしまい荷物をぬき歩きかせたがやがて馬目黒山山頂をテ-ン場とする。自分と高橋で明日からの道へ赤布をつけにいきかろうじて黒山下降点まで降り帰幕。この日みんなで話しあって小尾の足の具合、明日からのモ-シツなヤアを考慮して残念ながら敗退することにした。

8/11 T.S ~ 中尾根山から下れたコルからの登山道 ~ 登山口 ~ 水窪駅

T.Sからもときた道に戻り、中尾根山への登山道へ。問題なく下り登山口へ。ここからが問題で水窪駅まで20km歩かせるために最後親切な人に拾ってもらい駅へ。

深南部は深かた。これからも深南部にかぶり、深南部の詳細な記録を卒業するまでにまとめたと思う。一生お疲れ様。

縦走合宿の反省 一舟小尾智明

今回の縦走合宿は、南アルプスの深南部で人があまり登らない山だったので不安があった。

しかし、自分が予想していたものとは違っていた。テント場ではかなりの蚊がいてまいった。蚊対策はしていてもベテであると感じた。

しかし蚊がらりでまいてはダメだと感じた良かったこともあった。深南部のためか、ツカに出会ったことだ。野生のツカを見たのは初めてだったのでとても感動した。

また水がどこにあるのかわからない不安やルートが正しいのか不安もあった。初めての体験であった道にも迷った。やってこられたのは高倉さんや高橋のおかげだったと思う。自分もルトラインティングの技術をもっと練習しなければいけないと感じた。また合宿中に台風が日本に上陸し、2日間テントにたいさし（が）てはならなくなった。

雨がテントの中に入り込み、シュラフは水びたして2日間たえるのはかなり不快だった。これらのことも良い経験になったと思う。

翌日、少し歩き、自分の足が凍って居た。

原因は人体不足。左の指により足が凍っていたので
水を飲んでいなかったことなどから考えられる。

そのために断念しなければならなくなり二人には
大変な迷惑をかけてしまった。反省点を実行して
今後このようなことが起きないようにしたい。

無雪期も少なくなってくるので早く結果を残し
万全の状態まで冬合宿に臨めるようにしたい。

以上

いのちの山、深南部

高橋昭彦

苔むした原生林に立ち込む、幽玄を思わせる霧。朽ち果てて山に
還る倒木とその根元から生える若木。何処からともかく寄りてくる夥しい
数の虫。息苦しい程に密生した、行く手を遮るヤブ。これらのもの全てが
深南部の山々に息~~を~~衝く生命の息吹を感じさせてくれた。展望
こそ得られまいが、この命を育む山々は、深く、美しく、崇高な、
ミヤマといえよう。

入山者の少ない山という前評判通り、人には殆ど出会わなかったが、
踏~~み~~跡はしっかりしており、テープもあって、少々拍子抜けしたものがあ
った。しかし、敗退地点より先のヤブは、地面に足が付かない程の猛ヤ
ブと思われた。本格的なヤブ漕ぎはまた体験していないが、機会が
あれば~~も~~^再挑戦してみたいものである。

個人的な反省としては、事前に十分なトレーニングが行えなかったこ
とに看する。7月は、漸くバテが見つかって怖しかったとはいえ勿論
それは言い訳にならない。単に自分が時間を作れなかっただけである
現に先輩方はバテもしつつ、高難度で体カも要する山行を行っている。
金と時間はある種のジレンマのようなものであるが、これの折り
合いをつけるのも今後の課題である。また、今回失敗したの

が道具の管理である。行動中はともかく、幕営地でも道具(主に山靴と3ツケシューズ)を濡らしてしまった。その為最終日の林道歩きで靴擦れを作ってしまう、隊に迷惑をかけた。大学に入ってから、以前よりも行ったことが杜撰に多くなっている。なので、今までは習得した技術や知識をもう一度最終確認したい。読図についても、力か試されるような所で読み違えることか"しはしは"

（おたのび、如何なる山行でも地図を気にしていきたい。）

静かな山が好きを自分としては、今回は本当に楽しかった。日本の山のある種の真髄にも触れられたような気がした。おたのびとした山行こそこの山域には合っているのではまいかと感じる。来年は、それとは逆に、乙にかき歩きまくるロングラン縦走を現在計画中である。目指すは日本海、親不知。こういう経路を辿るかは請う御期待!!

（最後に、同行した高谷さんと小尾、そして差し入れや現役留守をしてくださった先輩方に感謝致します。おたのびありがとうございました。）

03.9.2

10/10

8月4日

出発5:40～清水岳7:30～不帰避難小屋9:30～祖母谷温泉14:15

栄養を取ってよく寝たのが幸いしたのか、この日は朝から快腸だった。晴れた空の下、出発する。清水岳への道は設計が1箇所出てくるもののそれほど危険はなかったのでそのまま進む。そして清水岳に着くや否やザ・バタフライことなゆ樹が蝶を求めフラフラとあたりを徘徊する。傍から見ている分には微笑ましくも怪しい光景だった。それも収まったところに清水岳を後にし清水尾根への長い下りへと入る。はじめのうちはお花畑が散在してキレイダネーなどと言いつつ下っていたが、不帰避難小屋から下はうっそうとしていて蒸し暑く、しかもところどころにFIXがでて思っていたよりも悪い道だった。しかも林道手前でなゆ樹が地蜂に刺されるというおまけもついてきた。長い下りで3人して足が痛くなってしまい、祖母谷温泉でゆっくりと足休めをする。

8月5日

出発4:35～樺平5:10～阿曾原温泉10:55～仙人湯小屋15:00

朝食を食べ明るくなるのを少し待ってから出発。樺平から先の登りでハタケがガス臭いのに気づく。調べてみたら見事にガス漏れしていた。あつれー、おかしいなあと思いつつふたを閉める。早めに気づいたためか失ったのは100mlと少なく助かった。気を取り直して水平道を進む。志合谷を越えたあたりでいきなりスコールにあい、1時間ほどシャワーを浴び続けて全身びしょぬれに。阿曾原には予定より1時間ほど遅れて着いた。池の平を目指し歩き続けるも、仙人湯のだいぶ手前で巻き道が崩壊して仕方なく雪渓をつめることになった。まわりにはガスが出はじめまかれるのもイヤだったので早いところの道に戻ろうとしたがなかなか見つからず無駄に時間を食ってしまう。やっと登山道を見つけ、仙人湯小屋に着いたときにはもう15時を回っていた。濡れと冷えで思っている以上に体力を消耗していたしガスはますます濃くなっていたので小屋の主人に話してテントを張らしてもらうことにした。幸い快く承諾してくれ、その日も冷えた体を温泉で温めて就寝。

8月6日

出発 5:20～仙人池ヒュッテ 7:10～二俣 8:40～真砂沢ロッジ 10:00
～剣沢小屋 12:30

朝食を食べ外にでると昨日とは打って変わって快晴。小屋の主人に礼を言
ってから出発する。温泉で疲れも取れたのかペースも順調、何事もなく真
砂まで進む。しかし会う人会う人みんなが午後から悪くなるという。どう
やら台風が近づいているらしい。これまで1日も天気図がとれなかったの
で半信半疑になりながら剣沢を登る。ここが長次郎、あれが源次郎と教え
ても前を歩く二人の反応は薄く、へえ～へえ～としか答えてくれない。ぐ
すん。

昼過ぎには剣沢小屋に着き、テントを張って剣のピストンどうしようかと
話し合う。結局行かないことにしたら1時間後に雨が降り出し、雷までな
る始末。行かんでよかった。

8月7日

出発 5:15～別山 6:10～雄山 8:10～一ノ越山荘 8:40～ザラ峠 11:30
～五色が原 12:20

台風が近づいてきているとのことなので、さっさと剣とおさらばして南を
目指す。山頂はガスっていたが風はそれほどではなく、台風の影響はまだ
ないように思えた。別山から一の越までときたまガスの切れ間に雷鳥平が
見える程度でほとんどは真っ白だった。一の越から先は結構展望があり、
ここに来てはじめて縦走らしい縦走をしてるなあなどと思ったりした。そ
の後2ヶ所雪渓が出てきたが平坦だったのでキックステップのみで通過。
昼ごろには五色に着く。その日の晚餐は激辛キムチで3人とも口から火を
吹き吐きそうになる。

8月8日

出発 4:45～越中沢岳 6:50～スゴ乗越小屋 9:00～薬師岳 12:30～薬師
峠 13:50

台風を気にしつつ起きてみると空は思ったよりも穏やかだった。早々と荷
物をまとめ出発。何度か小雨に見舞われるものの歩みは思った以上に早く、
9時にはスゴ乗越に。北薬師の登りで風が出はじめる。北薬師～薬師間が
想像以上に岩が出てきて時間を浪費した。薬師岳につくころには風はだい

ぶ強さを増してきて、下るときには斜め歩きを強いられるほどだった。その後葉師峠に着くも、テントは風の通り道になっていて設営に苦勞する。明日は直撃だななどと考えながら寝る。

8月9日

停滞

台風は1日で抜けてしまうようだったので下手に動かず停滞する。朝起きるとあまりの風にテントがつぶされそうになっていたので移動する。そのうち雨で浸水が始まる。運悪く下流にいたのはハタケでウォーターベッドですよなどと言っていた。合掌。

8月10日

出発 4:50~北の俣岳 6:30~黒部五郎岳 8:50~黒部五郎小屋 10:05~三俣山荘 12:05~三俣蓮華岳 13:00~双六岳 14:05~双六小屋 14:55

空はスカッ晴れ、台風さよ一ならと思いつつ出発。あまりにも順調でコースタイムを大幅に縮める。分岐に荷物を置いて空身で黒部五郎までピストンする。山頂ではこれまでで一番の大展望で1年の二人もここに来てやっと縦走の感動を味わっているようだった。その後も天気と同じように順調で、三俣で伊藤さんにお酒を渡し三俣蓮華へと登る。このあたりからまたもや曇り始める。双六でなぜか携帯の電波の入りがすごく良かったので佐藤さんに一報をいれ、小屋へと下る。日が落ちるにつれだんだんとガスっていった。

8月11日

出発 5:10~弓折岳 6:00~笠ヶ岳山荘 9:05~笠ヶ岳 9:30~雷鳥岩 11:00~槍見温泉 14:20

台風が過ぎたんだから今日もいい天気だろうと高をくくっていたら案の定裏切られ、朝からガスで出発してまもなく雨も降り始めた。天気に関してはもう3人ともあきらめてしまったらしく、歩いていても言葉少なめだった。笠ヶ岳からの下りでもずっと降り続いていて、岩ですべり泥ですべりでなかなか骨の折れる下山だった。槍身まで下りてくるとガスは雲にな

り、雨は降っていなかった。今までの憂さを晴らすように温泉でのびのびとし、明日は晴れますようにと半ば懇願しながら就寝。

8月12日

出発 6:05～焼岳登山口 6:50～焼岳小屋 8:50～サマテン 10:20

昨日の祈りは通じなかったらしく、朝からどしゃ降り。憂鬱ではあったがそれを抑えて出発する。焼岳小屋についても相変わらずの雨で、全員一致で焼岳ピストンを切る。それならばとさっさと下りてサマテンへと向かう。サマテンでは佐藤さんが待っていて、肉とケーキで雨の山旅を締めくくった。

10日間入っていたけれどそのうち降らなかった日はたった2,3日しかないという実に雨の多い山行だった。去年はほとんどの山行が雨に降られなかったので、雨に関してそれほど免疫がなかった。そのためつらい山行であったとも言える。しかし今回の山行でだいぶ強くなったのではないかと思う。ただ残念なのは雨続きで縦走の醍醐味の一つである展望を楽しむと言うことがあまり出来なかったことである。まあ今年の夏は冬への厄払いだと思って冬の天気期待するでしょう。

縦走合宿の反省・感想

三森武志

自分より上の上級生のいないこれほど長期の山行というのははじめてであり、そのためわからないことも多かったがそれでも得るものが大きかった山行であるのは間違いない。計画の段階での綿密な下調べや事前の準備、そしてなにより1年2人を連れて行くという責任の大きさ。そのどれもがこれまで経験していなかったりおろそかであったりした。けれど今回のこの山行で上級生としての意識が大きく向上したように思う。またそのための山行でもあった。

しかし反省する点もあった。まず1番の反省点は忘れ物である。本来なら絶対にしてはいけないことなのに今回はこれが多かった。なんとといってもペミカンを忘れたのは大きな反省である。冬であれば死ににいくも同然だ。他にも細かいものがいくつもあがる。特に今回は雨続きで雨具の着脱が多く、体温調節なんかも難しかった。それに対して自分は指示やアドバイスなんかをほとんど言えず、まかせっきりにしてしまった。こんな反省が上がるたびにまだまだ未熟だと痛感させられる。あれもできるようになりたい、これも出来るようになりたいなどといっていたらきりがなが、とにかく1つずつでも自分に出来ることを増やしていきたい。

今回の縦走はほとんど展望が望めなくて、ある意味ではストックで純粋な登山と言えるかもしれないが、でもやっぱり景色と言う楽しみがほしいと思ってしまう。

縦走合宿の反省・感想

(畠中 洸)

今回の縦走での反省点はたくさんあるが、特に反省すべきだと感じたのは自分の歩き方だ。以前から自分の歩き方は他の登山者と違っていると感じていたのだが、改めてそれを感じた。僕の歩き方はすごく雑だ。街中を歩くときの歩き方とたいして変わらない。先輩にも注意されたのだが、特に下りかかっていなかった。ズシンスシ、とひざへのダメージも考えずに歩いていた。日帰りの山行ならなるとかなるかもしれないが、1週間以上の縦走とすれば、そういったダメージが積み重なってひざを痛める可能性が高い。今後はもっと歩き方を工夫していきたい。また、地形図の見方ももっと練習しなければならぬと痛感した。

全体を通して、天気は良かったとは言えないが、雨に降られながらの行動や、強風によるテントの位置変えや張り直しは、とてもいい体験だったと思う。しかしやはり天気はいい方がいい。薬師峠から双六小屋までの行程の日は台風の翌日ということで最高の景色を眺められた。

縦走 感想と反省

1年 加藤 中樹

今回の山行に1年として参加するにあたり、以下の事柄を1つの目的として自分なりに心にとどめてあった。「北アルプスを概観する」こと。つまり、ほぼ最北にあたる白馬岳から立山連峰經由で上高地へと南下していくことで、北アルプスを北から南へ結ぶことが出来る。どのような山が並び、どのような自然環境を抱え、どのような様相を呈しているのか。目に映る物を見れば、先通点や相違点もつかみ出せる事で、言わば“テリトリー”の様な物を自分の中で作りたかったのだ。その結論を基に、感想・反省をまとめたかと思ふ。

まずどのような山が存在していたか。これほど、五色ヶ原や太郎平など“知らず知らずのうちに”た地域や、仙人池・薬師岳・双六岳など名前も知らずにはいりながら地図でも無い限りどこにあるのか分からない地域が“一体どこにあるのか、そのほとんど”（実際に歩いたところ及び景色として目に映ったところ）を空で描ける方になった。更に自然科学的プロットとして2点程挙げたい。まず1点は、稜線部と山頂部の違いである。すなわち、稜線はたいてい土壌質により構成されているのに対し、山頂部というのは立山・薬師岳・笠ヶ岳の顕著な様に岩石質に成る所が多いのではないだろうか。土壌が安定に保たれる環境とはどのようなものかを読み取る事ができる。もう1点は、「黒部狭谷」の存在である。三俣蓮華岳付近から流れ出る黒部川は北アルプスの中・北部を流る様に流れる。そのためにこの地域には支流も含め非常に深い谷が形成されていた。金沢県周辺、各所に万年の雪渓が存在している事から、黒部狭谷の深さが読み取れるのではないだろうか。

それに対し反省として挙げられる事は、他にとても事前の準備に関してである。(パシカンの話は置いておくとして)高山植物に関しても知識が無いまま植生を見ようと思っていた事は大きな問題であった。見られる事が予想できる植物を資料であらかじめ調べた方がいい事である事であった。

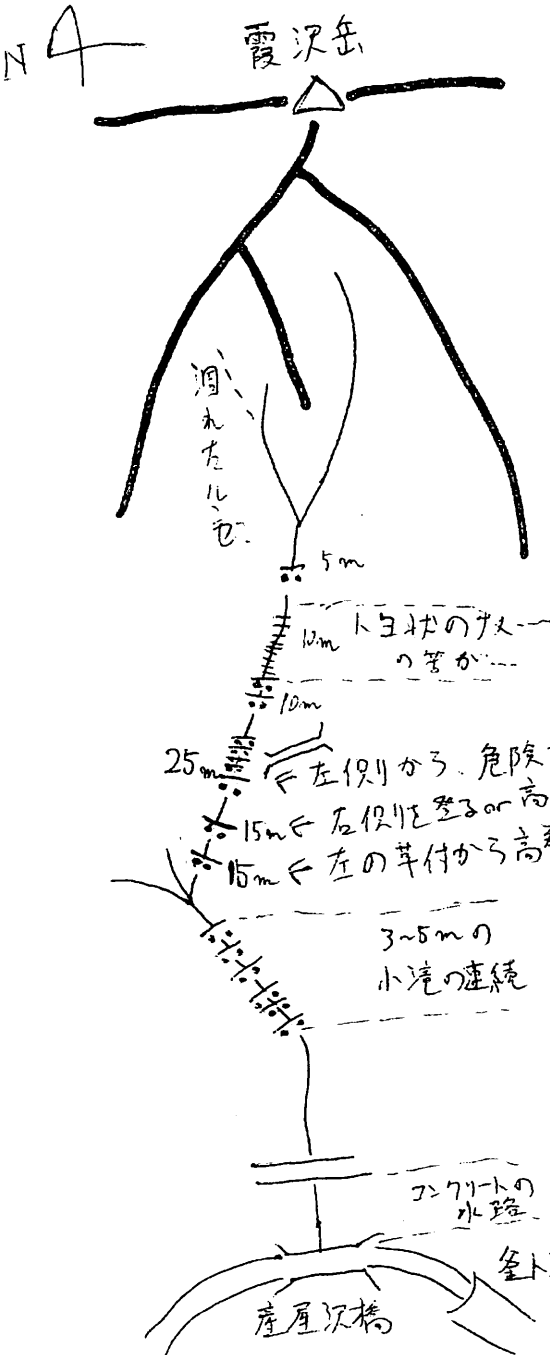
最後に、全体の反省としては何となくパシカンを忘れた事である。やはりこの失敗を今後の失敗として終るのではなく、持ち物の点検意識を高める事への反省をしっかりと深く思っている次第である。

サマテ山行

霞沢岳・産屋沢

8月16日

片寄哲夫(3) 高橋昭彦(1) 横山輝生(6)



コースタイム

- BC → 産屋沢橋 (1h)
- 橋 → 洞れたルンセ (約7h)
- ルンセ → 霞沢岳 (約4h)
- 霞沢岳 → 徳本峠 (約2h30)
- 徳本峠 → 明神 (約1h30)
- 明神 → BC (50分)

月明りに照らされながら、サマテに出発。1時間程で産屋沢橋に到着する。釜トニ礼から出てくるタクシーやバスの客に変な目で見られながら遡行準備をする。片寄さんは何故か死んだふりをしていた。まは橋の右側からヤブを径由して沢に降りる。

釜トニ礼 (4) 登山大系「槍・穂高」

初めのうちはコンクリートの水路を左から右に歩かざる。大きく
左に曲がり、正面には岩壁が見え始める辺りから小滝が連続する。
6m程の滝を左から高巻き、暫くすると三方から沢が入り込む
所に出る。目指すは、一番右側の沢(15m程)であるが、左のガレ石
葎付きから高巻く。ある程度の高さでトラバースすれば、沢の土に出
られる。晴れている時に振り返れば、焼岳が鎮座しており爽快。
次に15m程の滝が現れる。ここで初めてロープを出し、片寄さんリード
で右側のナメの部分に登攀する。ここが核心かと思われたが、
その先の25mのナメ滑の方が凶悪であった。knockさん(横山)
リードで、左側から取り付くが、手かかりが乏しく、岩もぼろぼろ
で支点もろくに働かない有様である。しかし、先日の台風で流れた
土石と思われる倒木が落ち、あわやknockさんが引きずり落ちてい
くという事態になる。幸いにも何もなかった。ひとまず全員落石
でできた!!と思われるラスまで行き、再び登攀開始。しかし、
あまりの岩の脆さに皆びびる。これもknockさんで奮闘で、何
とか切り抜けることに成功する。この先も小滝の連続であるので、
右側のガレから大きく高く。2つの沢が合流する付近で懸垂
して再び沢に戻る。ここから先は快適なトコ状のナメ。右の管
子の左が、台風の影響か、無数の小石や木の灰等で、
かなり汚い。それが終わると徐々に水流も弱くなり、

左側の尾根を目指して、洞れ左ルンでを登めていく。徐々に木登りとなり、最終的にはハイマツのヤブ踏みとなった。ヤブとの苦闘の末に山頂に到着。高橋は初のハイマツヤブに苦戦が利遅れてしまった。当初の予定では八衛門沢を下山路に据予定であったが、暗く利遅らしたので、徳本峠から下ることになった。明神の下りで高橋が足を捻り、結局BC着が22時となった。

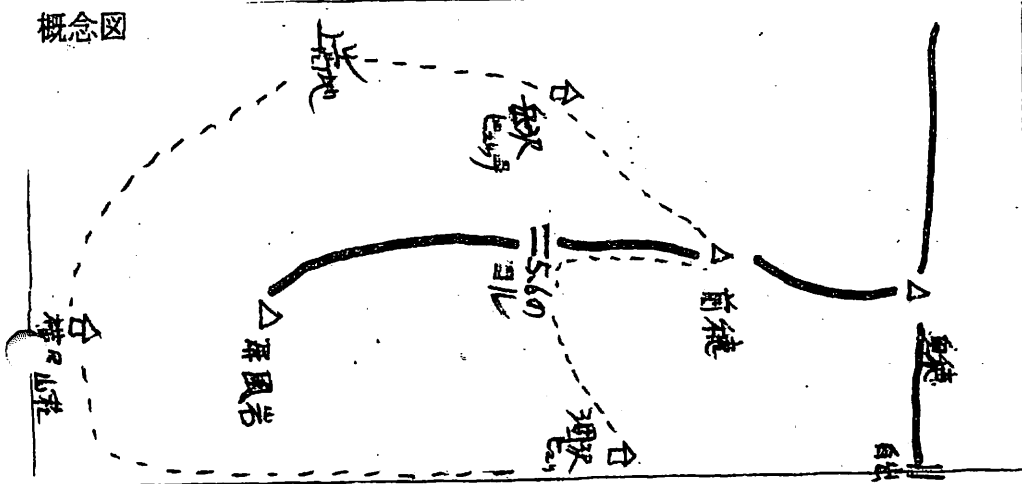
今回が初の沢となった沢だが、鏡登りや、ナメの歩き等、水飛沫に解相爽快な部分は利遅りに味わえたと思う。しかし台風の影響が思わぬ所に出ているのが残念であった。また機会があれば入望したいものである。しかしながら、相変るからカレ場歩きやヤブ登りが下手なので、今後の課題であろう。しかし、皆さん、大系に書いてあることとう飲みにしちおいけません。多分、初心者を下手にここにいきなり連れてくると、沢嫌いを作ってしまいます。25mのあの鏡はなかなかピンポイントです。側壁に触れら下にいる人の安全は保証できません。あと、バックパッカー行動時はナメナメ外であっても電池を付けてはいけません。knockさん、片寄さん、大変お世話になりました。

(文責 高橋 Hatto.)

前穂高岳北尾根 9月5日～6日

メンバー 片寄哲生(会3、織3) 大木信介(OB) 百瀬斐敏(OB)

概念図



コースタイム

9/5 Box(7:00)～徳沢(11:30 昼飯 12:00 発)～最低コル(15:30)～濁沢ヒュッテ(16:40)

7:00 東門にて百瀬先生と合流。先生の車に荷物を積み込もうとしたところで「ピッケルなんかいらぬ。ロープも50m一本でだ～いじょうぶ。保証するよ!」と、鶴の一声。ボンドさんと大ウケしつつ、そこまで言われちゃあとボックスに置きに戻った。

上高地に到着して早速出発。先頭を百瀬先生が行ったりボンドさんが行ったりしているが、どっちが先頭でもペースが速い。うっすらと汗をかきながらついて行った。

11:30 徳沢の食堂でお昼を頂いた。僕はカレーそば、百瀬先生は山菜うどんを注文したのだけれど、配膳されてきたのはカレーうどん、山菜そばだった。でも二人とも一向にお構いなし。そのままズーズー麺をすすってごちそうさま。

再び歩き始めて、奥又のお墓参りに行くことにする。ボンドさんは今夏遠征のジョラスで福島さんの霊に救われている? 無事の報告も兼ねてお参りせずにはおられなかったのだろう。お墓の周りに茂った熊笹などをむしってやると、少しは明るくなって居心地がよくなった感じがした。

まだ先は長いのですぐ出発。お墓参りにいくことにした時点で、パノラマコース経由に変更していたので、奥又白谷を詰めていった。

松高尾根は行ったことがあるけれどもパノラマコースは初めてだったので、松高尾根と行き先を異にした辺りからすでに未知の登山道が続く。適度に休憩を入れつつ標高を稼いでいった。途中から急にやぶ蚊が多くなった。蚊取り線香があればなあ……。

15:30 最低コル到着。一本取る間もなくボンドさんはシャッターチャンスを狙って屏風の耳の方へ走ってゆく。僕と百瀬先生はリングをかじってしばらくのんびり。

ボンドさんの帰りを待たずにヒュッテへ向けて出発。

ここから先はヒュッテがすぐのように見えるのになかなか着かない。しかも一般登山道としては道の作りがかなり悪い。所々に FIX ロープが張ってあるけれども、支点自体危なげな取り方がされているので、テンションかければどうなるか保証できない。

最低コルから 10 分ばかり先だろうか、ハーネスにメットを着けた男性が谷を見下ろして立っていた。その視線を辿ると数人の人影が。

片寄『何かあったんですか?』

男性『レスキューです』

片寄『はあ、訓練ですか。』

男性『本番です!』

『真下でレスキューの最中ですから絶対に落石しないように通過してください。』

今落としたら下の人間に直撃しますからね。絶対落石しないでくださいね!』

レスキュー隊の人曰く、先に見える木の根っこで足を滑らせて滑落したとのこと。滑るには違いないが、根っこのガバだらけで、落ちそうな個所にも見えないが、そういう事情であるから慎重に通過した。

しばらくしてポンドさんも追いついて来、道沿いに生えた木苺を三人して食っている内にヒュッテに到着。

ヒュッテでは VIP 待遇。夕食では下界でも口にできなさそうなおいしいステーキをご馳走になって幸せ! 食事だけでなく、百瀬先生と小屋のご主人小林銀一さんの話も飛びぬけておもしろかった。あの話を聞けただけでも十分楽しかった。

ちなみに昔の人はヒュッテから穂高山荘まで 15 分で行ったとのこと。昔の人間の体力? 精神力? には頭が下がります。

9/6 起床(4:00)ヒュッテ発(5:15)~5, 6 のコル(7:10)~前穂高岳(11:50-12:15)~
岳沢ヒュッテ(14:45-15:15)~登山道終了点(16:45)~上高地(17:00)

3:30 に一週目を覚ますが、外の風が強く雲も立ち込めているようなので、もう一眠りして様子を見る。

再び 4 時起床。とにかく支度を整えて、小屋を出発することに。朝の弁当を食べてすぐ出発。外は風強く、5, 6 のコルも含め山頂付近は雲の中であり、今にも雨が降り出しそう。とはいえ、ここで引き返すのもったいない。とにかく 5, 6 のコルまで行ってみることにした。時折雨粒が顔を濡らすような感覚に襲われるが、まとまった雨は降って来ない。ガスのため 5, 6 のコルは一切見えず、ただひたすら歩きやすいトレースらしき道を進んでコルに到着。

ここで登攀具一式を着けていざ出発。ここから先は岩が連続するが、すでにガスの湿気で岩は塗れていると言ってよい。5 峰、4 峰とも登りはさほど問題なかったものの、いずれ

も下りで道を誤り上り返す羽目になった。この辺りはいい加減なトレースがあちこちに見当たるため、ガスっていると誘い込まれやすい。3, 4の科尔までは4, 5峰ともに各ピークから涸沢寄りを歩くと考えていた方が間違いにくいかもしれない。

4峰の下りで迷っている頃から雨が降り始めて多少気が急いたが、何とか正しいトレースを発見して3, 4の科尔へ。

実質の1P取り付きまで上がってからアンザイレン。雨が止みそうな気配はまったくないが、ここまで来たら前に進む方が早いと判断して登攀を開始する。片寄りリード、ボンドさんブルージック登攀、百瀬先生フォローということにした。

濡れている岩を乗り越えてルートを進んでいく。岩が濡れていて重登山靴のままだから、足を上げるのに苦労したが、落ちる気はまったくしない。残置を積極的に使わせてもらって先を急いだ。

ザイルの流れも悪かったので、小テラスにある残置支点にてピッチを切る。すぐフォローしてもらったら、乾いた岩でもこんなに早くフォローは終わらないだろうという位あっけなく登ってくるので驚いた。

2P目。小テラスから右のリッジに出て、先に見える大きな岩溝に入っていく。溝の奥にあったかぶり気味の巨大なチョックストーンを越えるのが、濡れているのもあって少々手間取った。越えてから念のためお助けをぶら下げた。次なるは凹角左側のフェース。スタンス、ホールド共にガバサイズで難なく越える。ピナクル状の岩にかけられた残置支点で確保姿勢に。巨大チョックの所で少し迷ったようだが、すぐフォローがあがって来る。先にきたボンドさんに偵察に出てもらって、自分は百瀬先生の来るのを待つ。間もなく上がってきた先生と、ボンドさんを追いかけるがこの先ザイルは必要ない。

涸沢側からトラバースするようにして2峰まで。3峰下部あたりと思われる場所の岩棚歩きが少々おそろしかった。

2峰からは無難に懸垂。ここも残置があるので早い。ロープの回収が済めば後は頂上まで歩くだけ。

そして小雨の中、前穂高山頂到着。びしょ濡れな上に風当りが抜群であるためあつという間に体が冷えていく。とりあえず腹ごしらえということで、雨の中ヒュッテの弁当を広げてランチタイムに。百瀬先生の持っていたテルモスの温かいお茶が小腹に心地良い。

のんきにしている内に凍えきった体を奮い立たせて出発。しばらくマーク伝いに下ってから、マークをずれてそれと平行に走るガレたルンゼ状のトレースの方を歩く。百瀬先生曰くこちらの方が歩きやすいとのこと。

吊り尾根との分岐で二人組みの登山者に会うほかは誰にも会うことなくひたすら下る。所々の鎖場や、スタンスが穿たれている岩場で百瀬先生がそれにまつわるエピソードなどを話してくれたのが面白かった。長い下りに飽き飽きしてきた頃に雨が止んだらしいことに気づき、同時に岳沢ヒュッテも視界に飛び込んできた。ヒュッテ目前でまた降って来

た雨を避けるように小屋の中へと入り、ラーメンをご馳走してもらった。何時間ぶりかの温もりのためかラーメンがうまい！

食べ終わって、装備を改めて出発。上高地が見えているが、ここから想像以上に長いと聞かされて、ダラダラ下る他ないのだと諦めた。区切りごとに現れるプレートの示す数字を数えながらの下山だった。雨は降っていないからまだマシとは言うものの、延々と続く下りに辟易した。

なんとか雨に降られないままに上高地到着。幸い釜トンのゲートが閉まる時間までまだ余裕がある。百瀬先生の車に荷物を積み込んで早々に上高地を離れた。

帰り道の途中、島々の薬膳カレー屋さんを訪ねて、おいしいカレー、そしてハーブティーで癒されて今回の山行が終わった。

『反省』

- ・ 結果的に登攀は成功だったが、あの天候での強行登攀は感心されたものではないと思う。風がそれほど強くなかったのがラッキーだった。
- ・ 5峰、4峰の下りのルーフアイは要注意。ガス時は迷いやすい。

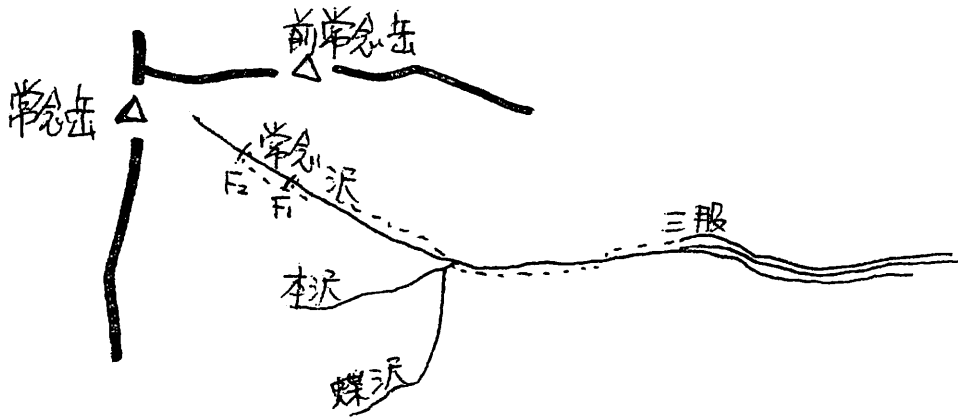
『感想』

- ・ OBとの山は二度目。それぞれに新しい発見や、おもしろい話があって、年の近いOBとの登山や現役だけの登山にはない楽しさがあった。年の近いOBだけでなく年輩のOBとのつながりを深めるためにも、こうしたOBとの登山が大切にされていくことが望ましいと思った。

文責 片寄

常念岳・常念沢 (9/6~9/7)

山 佐藤 祐樹 (会4,理3) 三森 武志 (会2,理2) 加藤 伸樹 (会1,理1)



9/6 7:10 三股出発
 7:45 本沢入渓ポイント
 10:15 常念沢出合
 10:30 常念沢と小沢の出合付近 B.P.
 ↳ 釣り
 16:30 B.P.着

この山行は医学部
 山岳の顧問である能
 勢先生を訪ねた際、
 「本沢で尺物イナダが
 釣れたよ」との情報を
 得、その一週間後に

行、よく行って見ることにして、先生は釣れたイナダの長さを
 1尺2寸2-3分と、そして、2-3分をさらさらと振りながら
 その釣れた時の様子を語ってくれた。なほほと「正確に
 この2-3分からすると相当なイナダだろう。俺も釣りたい!!
 と思いつつ、三股に立った。三股という名は、三つの沢で
 ある常念沢、本沢、蝶沢が出合うところからきていること
 とは知らなかった。そこで登山道を離れ本沢

をしばらく歩いて行くと釣人に会った。その人に釣れまくるから氷の中に入るな! と言われ、いやなオヤジだ"と思っただが、後にこの沢の形状、釣り方等を教えてもらった。前言指図。人は話してみるといい奴が多し。その親切なおじ様言わく、本沢、蝶沢については"お天気沢"と呼ばれ、爆釣するときもあるが"その週間後はボ"う"というところが"多々あるという。常念沢はかなりの大物が出るが"数が少く、その上"なせ"が毛バリしか釣れないという。このハンテコリンなる沢でしばらく竿を出せば"釣れまくる。本当にイナ"が"いるのかというかもあやしくなってくる。が、熊勢先生の満面の笑顔が頭に焼きついている。このままでは、... とおぼろげくおのこの手で釣ってみる。おと蝶沢に少し入るとこ"が"ある。なかみかすか。うーん"上が"て"な"い"と"も"た"え"て"いる"う"ち"に"ハ"リ"を取られてしまう。必死にイナ"が"入った穴をまさか"が"つかみ取りながら"で"き"り"わけ"が"み"い。あきらめてまた釣りを始める。た"い"ぶ"に"心"得"た"ら"しい。その後良型を二本釣り、その日の夕"夕"とす。骨はもちろ"ん"骨"酒"に。うまい!!



9/7 5:15 起床
6:15 出発

8:00 常念沢 F1

9:00 常念沢 F2 (2000m付近) にて敗退決定

11:00 三服着

さて今日は釣リから離れ登山である。しばらく歩くと
中間に洲を持ち、長 20m の滝がある。この滝は三森
君が洲にはまが果敢にリード。F₁をやと越えりと
沢の様相が変わってくる。一面、赤茶色の大崩壊地帯。
大きな浮石がゴロゴロし、しらいには 40~50m ありとろな
崩壊中の滝 (F₂)。周りは切り立、といて巻くことも不
可能。"地獄谷" という名称はよく見かけすが、この常念
沢こそ、その名称にふさわしい。とてもじゃないか、沢
登りをやる沢ではない。F₂で敗退を決定し、下山
した。

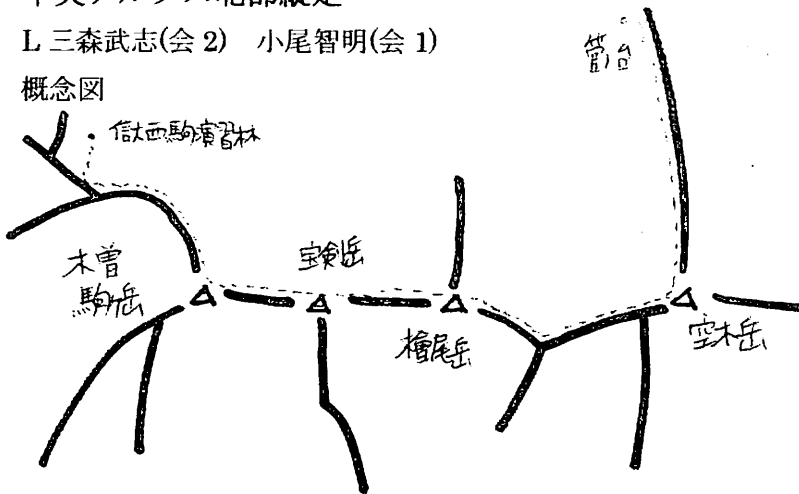
蝶沢及び本沢は最後まで洋行できそう。た
た昔は滝あり洲ありで楽しい沢であったが、今は
その大羊が埋まるとはたらしい。たた、イワナは確
実にいる。しかも大物が……



中央アルプス北部縦走

L 三森武志(会 2) 小尾智明(会 1)

概念図



9月10日

西駒演習林 4:45～西駒山荘 7:30～木曾駒が岳 9:00～頂上山荘 9:10
今回は冬の偵察も兼ねていく。前回もそうだったけれど無残な結果に終わったので、今日こそはとかなり気合を入れてやってきた。前日のうちに佐藤さんに車で林道終点まで送ってもらい、この日は朝早く出発した。陽はまだ出ず、薄暗い中をヘッドラ行動しながら歩いた。自分が先頭でかなりのハイペースで進む。登り始めは天気がよく、晴れていて、こりゃ期待していいかななんて思っていたが、やっぱり僕は中アに嫌われているのだろうか、またもや西駒山荘あたりから雲行きが怪しくなってきた木曾駒に着いたときにはすでに暴風雨で打ちつける雨が痛くて風上を向けないほどだった。逃げるように頂上山荘に向かい、そこで風がおさまるまで休ませてもらった。しかし一向によくならない。2時間ほど経って雨が止むがもうすでにこのときには二人とも濡れで体が冷え切っていてとても動ける状態じゃなかったので仕方なくその日は頂上山荘で1泊。

9月11日

出発 5:25～宝剣岳 5:50～極楽平 6:15～檜尾岳 7:50～木曾殿越 10:10～空木岳 11:20～すり鉢窪避難小屋付近 12:30～空木岳 14:00～池山小屋 17:15～菅の台登山口 18:15

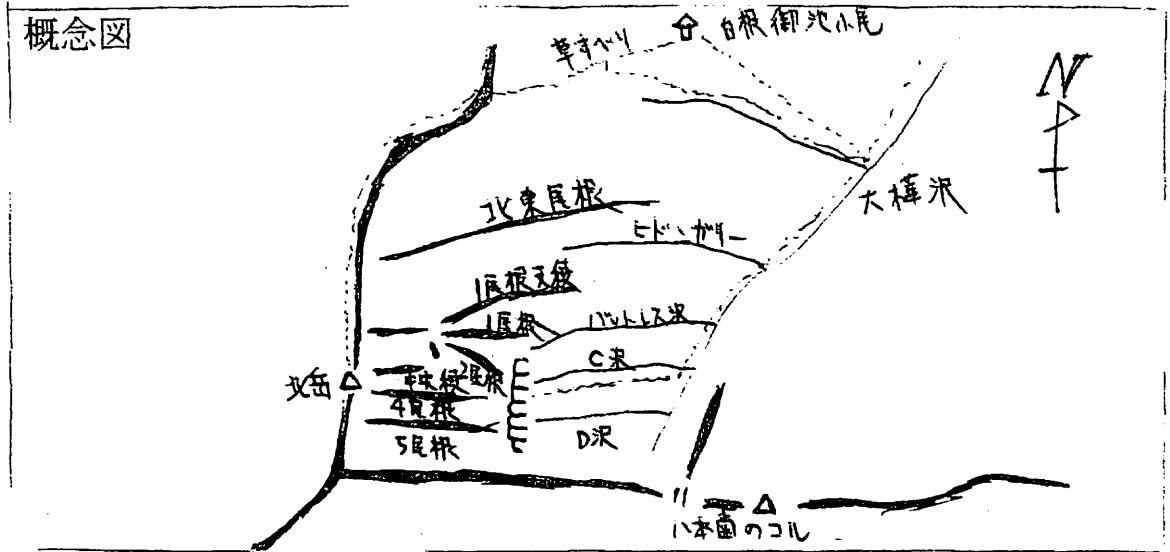
風は相変わらず出ていたが雨が降っていなかったので何とかいけるだろうと踏んで出発、ガスの中宝剣岳を目指す。鎖やらマーキングやらがやたら出てきてこれは昨日行かなくて良かったなどと思いながら進んだ。宝剣を抜けたあとはまたもやハイペースで歩く。檜尾岳を越えて熊沢岳あたりから晴れ間が見えてきて、ああやっと思われたと歓喜していたがそれもつ

かの間。空木の登りでこれまでのハイペースがたったのか、小尾がぼてる。空木岳の山頂で越百まで行けるか聞いたらがんばると言うので、よしそれじゃあ行こうじゃないかと意気込むも1ピッチで完全にぼててしまいやむなく池山尾根で下山することに。しかし駒石を過ぎたところで1歩も動けなくなってしまう。こりゃ予備日をつかうことになるかなーなんて思ってたら実は単なるシャリバテでピン食を食ったらすぐに治り、はねるよう下山した。

前回よりましな内容とはいえ目的の越百岳まで行けなかったのは残念だ。ちょっとペースをあげすぎてしまったのが反省。なんだか悔しいのでもう1回だけ行くことにする。

北岳ハントレス 9/15 ~ 9/16

高谷 英太郎(2) 三森 武志(2)



9/15 7:00 広河原 ~ 8:40 白根御池小屋 B.C

前日甲府幕岩に行き、奈良田まで。朝奈良田から広河原へ。奈良田からの林道は
 我々にとりなじみ深いもので(?)車下くるのは始めてであつたが風景を楽し
 みながら広河原へ向かふ。広河原からは快調に歩けし程なく御池小屋へ。テ
 ントを張りあまりにも暇だつたので山頂に向かうことに。(沢等をテ
 ントを張り山頂を往復して帰幕。この行動は計画書にない行動だつたので軽率だつた。

9/16 3:00 起床 ~ 4:00 B.C 発 ~ 6:00 下野口カリー大滝 乗取付 ~ 7:20 四尾根取付 ~ 終点 10:50
 ~ 11:30 北岳 ~ 15:30 広河原

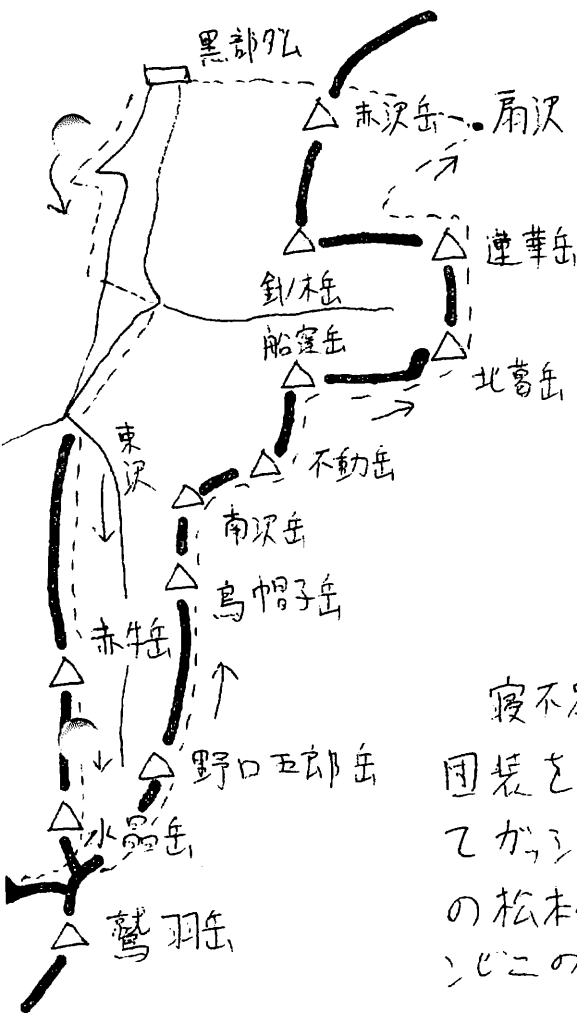
テント行動で取付に向かう。迷ふことなく下野口大滝取付へ。高谷リードでトハン開始。
 2ピッチで横断バントへ。Cカリーをつめ四尾根取付へ向かう。エドノガリを越して取付。
 三森リードでトハン開始。つるべで順調にロープを伸ばし何の問題もなく終了点
 へ。山頂に向かう。山頂でゆくりして下降。テントを撤収して広河原へ。

今回の山行は2年生どうしての初本キルトであり、とても楽しかつた。ハントレス
 が我々2人のかしきりでありとても気持ちよく登れた。三森君 これからもヨロシク。
 秋は谷川。冬はヒカの雪嶺に行きましょい!

1年生自転車山行

松本～扇沢～読克新道～裏銀座～蓮華岳～扇沢～松本

高橋昭彦(農1)、加藤友中樹(理1)
島中 洗(農1)



9/17

Box集合	330	◎
出発	350	◎
扇沢着	915	①
発	930	①
黒部9km着	945	○
発	1010	○
平ノ小屋着	1320	①
発	1350	◎
平ノ渡し場	1425	◎
東沢手前T.S	1610	①

寝不足防止の為に3:30 Box集合。団装をツバって早速出発する。かしてからシャを背にした怪しげな3人は夜の松本へと消えていった。穂高町のコンビニの辺りからは明るくなってくる。その後、長い坂で奮闘し扇沢に到着。まずは最初の核心は越えることができた。しかし、早くも全員かバテ

始める。ここからはトロリーバスで黒部ダムへ。自転車は観光案内所の裏手に停めさせていたが、ダムでは観光客のいぬ間に破砕帯の水を汲む。トッポはツバって順番に交代するということを出発。閑散とした壱堂側へ向かう。トンネル内で分岐してダムの西側の水平道を歩く。始めは下がゴクリで至極不快であるが徐々に山道らしくなってきた。この日は地形図的にアッアからアッア 少くも楽勝と思っていたのだが、木梯子や階段がべろぼうにあつて予想外に苦戦した。平ノ小屋で船が出るまで一本を取る。ここには菜園や池に人じんがおり、小屋も下界の民家と全く変わりなく(こまき寮なんか比じゃあい…誤)別世界であった。山小屋は、個人的に徳本や岩魚留小屋の方が味かあっていいのにな。船は我々以外の誰もいなく、貸切状態。運転士のおさんは釣りを垂ろしていた。我々様という、早出の影響か、文字通り船を漕いでいた。針木谷に到着するにつれて出発。こちらは足元がかなり切れ落ちており木梯子もかなり多い。次第によじんが湖面もいつしか透明な清流に変わり、谷も明るく広く開けてきた。沢を渡ると暫くすると、右手に大きなアソビ(のおおもの)が立っている。砂石樂地に出る。非常に寝心地が良く、アソビの木の樹は命拾いしたか、虫かやちろ多かつた。夕食はうどんと、佐トさんでknockの差し入れを有り難くいただきますが、いきなり食いしごきにまった。

9/18

起床 330 ○

出発 445 ○

黒部ヒコヤ 500 ○

赤牛岳 1005 ①

こ 登 1025 ①

水晶岳 1240 ①

こ 登 1305 ①

岩苔乗越 1405 ①

こ 登 1445 ①

2800m 頂 1455 ②

この日は山行のメインイベント(?) 読売新道である。長大な尾根を登るので、スピード行動での出発だったのが、それは後で裏目に出た。平地を暫く行くと東沢に出る。ここで水を汲み、鬱蒼とした樹林の中へ足を踏み入れる。始めのうちは先か思いやられるような急登であったが、暫くして傾斜ゆるくなり、快適に高度を稼いでいった。また、時折見える両側の稜線もゆかみとなった。徐々に樹高も低くなり、いつの間にかやが森林限界を突破していた。丁度この日は我々の頭上を片が雲一つ無いような状態で、秋風も付いて実に爽快であった。その後

も皆後の黒部カムヤ、導師、鳥帽子や野口五郎の目をやりながら高度を上げていく。眼下には赤牛岳が文字通り鎮座している。花岡岩や砂礫交じりの尾根から、カレの急登へと変わっていき、漸く山頂に到着する。一本取った後、稜線の先に聳える水晶岳を目指す。殺伐としてはいるものの、快適な稜線散歩で、左をぬ山並や、眼下の水晶池等も見下ろすことができた。近付くにつれて険悪な岩壁が現われ、くるか、ここを右から巻いて山頂へ。一旦北峰に出るか、それより高い南峰へ向かう。おまじ来るし、平日をというのか、か利人が増えた。ここから岩苔乗越を見下ろせるか、本草に水があるのかと疑問に思ってしまう。おまじが一気にここを足は伸ばすが、逆に早く着き過ぎてしまい道の整備をしている人もいたので、祖父岳方向へ10分程行った所にテントを張った。教訓、開テと揚を早く着いてはいい。そして、この日も食いごまじした。

9/17

- 起床 400 ◎
- 出発 500 ◎
- 岩倉乗越 510 ◎
- : 発 525 ◎
- 水晶小屋 600 ◎
- 野口五郎岳 800 ◎
- 野口五郎小屋 810 ◎
- : 発 825 ◎
- 烏帽子小屋 955 ①
- : 発 1015 ①
- 烏帽子岳分岐 1035 ◎
- 烏帽子岳山頂 1050 ◎
- : 発 1105 ●
- 烏帽子岳分岐 1115 ●
- : 発 1125 ●
- 南沢岳 1155 ●
- 南沢乗越 1217 ●
- : 発 1230 ●
- 不動岳 1305 ●
- 2459P(本では船窪岳) 1445 ◎
- : 発 1455 ◎
- 船窪岳 1555 ◎
- : 発 1605 ◎
- 廿倉岳下 T.S 1645 ◎

この日は夜中から風が強く、それが日中も続いた。とにかく寒かったので足早に徹収して出発する。岩倉乗越の三俣山荘側で水を汲み昨日来た道を引き返す。稜線は正しく風との戦いで早くも斜め歩きを行っていた。また、東側の朝焼けによる赤と西側の深海を思わせるような深い青のグラデーシオンが、実は不気味でこれからの荒天を我々に告げているかのようであった。水晶小屋で軽く1本取ってすぐに出発。かした岩稜帯を下ってゆく。檜側の赤葉付を崩壊した斜面と東沢側の優美なカールが対称的であった。吹き荒ぶ風に耐えながら岩罅の道を進む。砂礫の斜面をジグザグに登り、巨大な野口五郎岳山頂に出る。しかし、あまりの風の強さに通過して一気に小屋まで行った。流石は北の最凶クワスの強風域である。とにかく寒いし天気も悪化することが予想されたので、一気に烏帽子小屋まで足を伸ばす。この区間は風も強いが平坦な高速道路(どろい早くい特)で向かう最高の稜線散歩を味わうことができ。三ヶ岳の手前では本山行初の槍が雲を纏って姿を現した。烏帽子小屋からは厚化した花崗岩の間を歩く。山頂への分岐にサワを置き山頂まで往復する。眼下の高瀬谷や四十八池等はまるで箱庭のようであった。

また、この辺りから雨が降り始めてきた。分岐でカッパを装着して出発。庭園のような池と木々の間をすり抜け、砂礫と花崗岩に覆われた南沢岳への登りにかかる。平坦で何も無い小頂を通過して、崩壊の激しい南沢乗越へ下る。そして、南北に細長い不動岳小頂に登り返すが、徐々にこの辺りから風雨が強くなっていった。ここを下って次は2459m(カトマツリでは船窪岳)に登り返す。本当にこの辺りのアツタウゴは体力的にも精神的にも辛い所である。その後もザレザレの斜面のアツタウゴを繰り返して、何とか七倉岳下のテントカ所に辿り着いた。いよいよテントを設営して体が冷えて、うち下の水場へ水を汲みに行く。この日はカレーであったが、3晩連続で食いしごもとなった。しかも酔ったまゆ樹によろぐ屋金ノ助が乗り移りえうになった。

9/20

起床 400 ●
 出発 540 ◎
 七倉 600 ◎
 七倉乗越 635 ◎
 丸 646 ◎
 北高岳 715 ◎
 北高乗越 806 ◎
 丸 825 ◎
 蓮華岳 930 ◎
 丸 950 ◎
 針ノ木峠 1025 ◎
 丸 1040 ◎
 大沢小屋 1425 ●
 丸 1440 ●
 扇沢 1530 ●
 松本 2100 ●

夜中から間隔を開けて降っていた雨も止みかすも晴れてきた。昨日はおどろしい程崩壊していた不動沢も純白の雲海に覆われていた。小屋の方へ進むと七倉岳への分岐に差しかかる。ここでかなりの数のおぼろちゃんを引き連れたパーナーと擦れ違った。これからあのアツタウゴに突っ込むのかと、3人で感心する。細長い七倉岳小頂を過ぎ、狭い岩稜帯を七倉乗越へ下っていく。北高岳への登りはフェイスが多く嘆息する。そして朝露に濡れた70x19の靴とつまみまから北高乗越へ下る。ここから蓮華岳までは一気に登ってしまった。基部から中盤までは岩々しており落石が気になるが、特に問題は無い(鉄のツールが

使われていてじじい(笑)。針ノ木とは対照的に優美な稜線を下っていく。針ノ木峠では人のいいおっちゃんが写真を撮ってくれた。ここで槍や表銀の山並に別れを告げて扇沢に向けて出発する。しかし、ここで問題発生。道列に下っていったら雪渓をトラバースしなければならぬ所に出たのが、中央に穴が開いており、いかにもヤバそうであった。しかもトレースが見迎らるゝので、他にルートがあるんじゃないか。と一旦引き返す。しかし、ここしかないと分かったので、厚そうな所を進む。その後もう一回雪渓をトラバースして漸くまんなかに出る。駐くして雲海の中に入ると雨に変わった。大沢小屋で小休として再び雨の中を扇沢へ下る。何度か車道と山道を繰り返して何とか到着。しかし、自転車山行は松本に帰るまで山行です。ここで中継の自転車の空気が完全に抜けていることが発覚する。しかし、有料駐車場のお屋敷のおっちゃんに空気入れを借りることで一件落着。ところが更に不幸なことに、大町市の辺りで再びパンクし修理不能に。止む無く、自転車を信濃松川駅に残置して彼方は電車で帰松本することになった。かくして、波乱万々に満ちた1年生山行は終わりを迎えた。

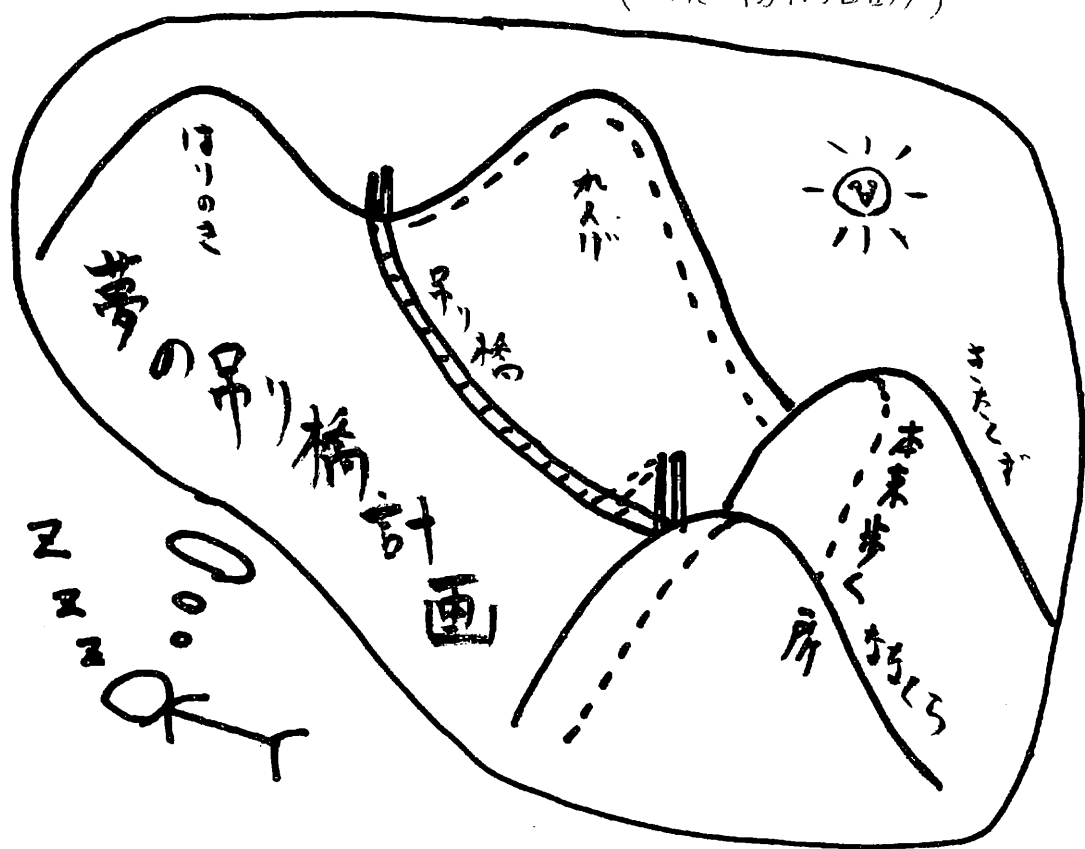
反省・荷物がある程度軽ければIPを長くして水を節約する

- パスタは細めんの方が良い。
- 開行の時は到着時間を計算すべき。あと他言無用です。
- コースの下調べが不十分。特に最終日
- 自転車山行は修理具と空気入れ必須
- 短期の時はカッパカバーがあると余計な濡れを防げる。

そんな訳で初の1年生山行は無事終了いたしました。差し入れや現役留守もして下さった皆さんありがとうございました。お別れ

がこのコではあったものの、三人共純粹に山を楽しめたと思います。
 それ以上に特筆すべきは、何といへどもアフロに自転車を使用了こと
 です。自転車山行は既に片寄さんやBOND(大木)さんをはじめとする諸先輩
 方がやっているらしいですが、山行に限って言えば、離松から帰松までを
 我々の独力でやれたことは大きな収穫です。(勿論留守等のバックアップは
 上級生頼みですが)。来年以降上級生として自分で考え自分で動けるよう
 なる為の第一歩としていいと思います。最後に、直前に私の軽率な行動
 で留守の皆さんに多大なご迷惑をおかけしたことをこの場でお詫言
 上げます。また、改めて、差し入れを下さった上級生にも感想いたしま
 ありがとうございます。

(文責 高橋昭彦)



屏風岩 (穂高) 9/27 ~ 9/29

ルンゼ"杖"スラッグルート及び、電線ルート。

△ 佐藤 祐樹 (会4, 理3)
横山 輝生 (会6, 織?)

9/27 15:00 上高地発 117から夢見ていたた"ろうか", ...
16:05 明神 やつとこの日か"詰"ずれた。それは
17:50 横尾B.C. 屏風... 去年の夏からずっとずっと
想い絵かいてた。今まで5回以上は計画してたであろう。
しかし、ことごとく雨に降られた。見よ! この秋晴れを。
やつと、やつと。晴れがこみよもうれしい。久しぶりだ、
堅く乾いた岩に紅葉しかけた木々... うんぬん妄想ほか
ま"りみく広"がって行く。あ、と117まで横尾B.C.へ。明日
への期待の内"帰"る。明日は壮絶な登"上"にみるこ
とも知らず...

9/28 4:00 起床 15:00 取返決定
5:00 出発 17:30 取付
6:30 ルンゼ"杖"スラッグ取付 18:30 B.C.着
13:30 外化戻りラッス

もう日が昇る"か"遅い。6:00ころでやつと明るくみる。ルン
ゼ"杖"スラッグの取付までは本谷橋からヤブ"こ"ま。人があて
いみい"か"。踏み跡"らし"きものはほとんど"な"かた。取付"に"つ
いて、さすが"ルンゼ"と名"か"付けた"け"あつて上から水"か"
流れている。しかし、高"ま"た僕らの鼓動を抑える要因

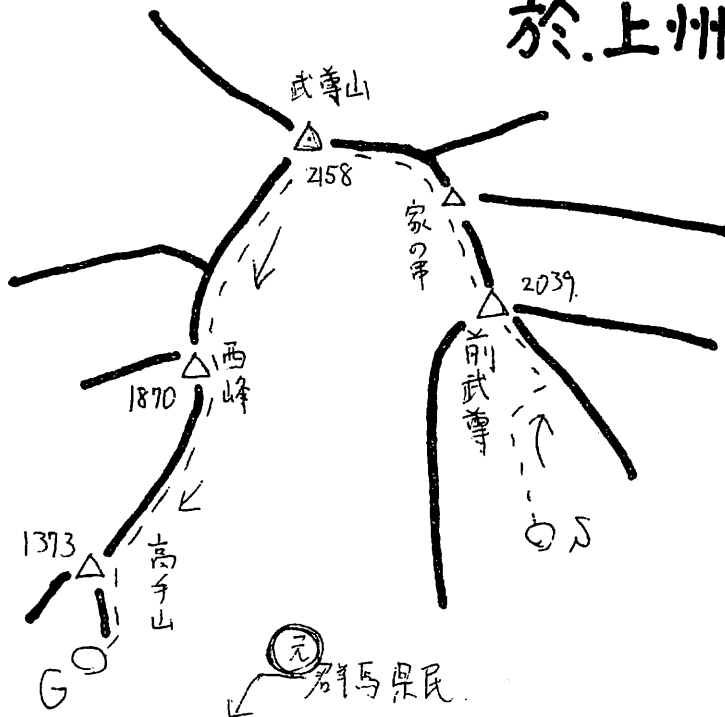
とはみらなかつた。1P, 2P, 3P と濡れた岩も以外といける
 じやみかと言ひから、ミリミリとすべりのRに注意しから高
 度をかせく。4P目、第一の核心部、見るも無惨に水が流
 水ている。しかし行って見る。振り子AOで向ひか抜けるが、
 昨日想ひいれ書いていた快適な登山はどいから、2人とモ
 スブ濡れ。これは岩登りでなく滝登りである。5P目、6
 P目は特に支点が少なく、しかももろい。つかんでいり手、の
 ていり足は浮石の上で生きて心地かしまい。フッ、シュをたぼ
 ねて振り子トラバース。やっとハンク帯を抜けて外化夏テラス
 へ。ここから快適な登山だと思ひませ。ルートを見失ひなう、
 東は冬にもここで取逃している。やはり、あからみい... 左往
 左往しているうちに時間切れ、テラスもどけてきたとき
 には2人とモ小焦りしきっていた。空には雲が覆っている。ま
 まか、明日は雨?

9/29 4:00 起床	12:00 雲稜 終了点
5:00 出発	13:00 T4
6:00 T4 尾根取付	15:00 横尾 B.c.
8:00 T4	18:00 上高地

朝、起きてみると空には雲が覆っているが雨は降らな。そ
 れがみんとT4尾根取付に着くころは快晴に。今度こ
 そ。と味調にカイルガのびていく。自命のたいたいクライ
 ミングであった。堅く、乾いた岩。紅葉しかけた常盤、蝶
 をバツ、ワに登っていく。最高である。昨日のネチネチした
 泥くさい登山とはまさに雲泥の差。屏風よ。ありがと
 う。おまえは最高だ。

山田昇記念杯登山競争大会 於.上州武尊山

9月28日



水平距離
14.12km
実測距離
14.8km
累積高低差
1330m

- ・高橋昭彦 (1) 2時間42分48秒 9位
- ・高谷英太郎 (2) 3時間16分6秒 35位

群馬はおろか日本を越え世界を代表するヒマラヤニスト。山田昇の偉業を風化させまい為、として登山の啓蒙、普及、発展を願った大会が本大会である。出場者は高校時代から過算して4回目の出場となる高橋と山岳競技初参加の高谷さんである。高橋は前武尊では5位を維持するも、ここで力尽きて昨年より大幅にタイムを落としてフル。高谷さんはこれまでに楽しんで来たか付たようで。ゴール後は楽しい

編集後記

無雪^期記の山行報告だけで50Pを超えるとは驚きである。
この編集後にも、上ノ殿下(黒部)、檜、谷川-1信沢、縦走(中ア、戸総)
等山行がめじろおしである。これは信木の山へのアプローチの近さ
と会員の山へのモチベーションの高さの相乗効果を示しており喜
ばしいかぎりである。これから季節は冬に向かうわけだがこの調
子で山を思う存分楽しもう。楽しくなければ山じゃない。

コ-ヤ

編集：コ-ヤ
表紙：タカハス